

道祖神 しんぶん 第四号

2021年12月11日
発行：道祖神芸術調査グループ

山梨アートプロジェクト 2021
深澤孝史
「道祖神リプレゼンテーション」

ご意見・ご感想は
dousojin2021@gmail.com
までお送りください。

「道祖神芸術調査グループ」始動 その2

今回は、道祖神芸術調査グループの特別調査員について紹介させていただく。①本阿弥清さんは、静岡市清水区在住で、ランドスケープ・建築の設計が本職でありながら、美術評論家をしている多才な方である。丸石神に魅せられた美術評論家石子順造や、美術家の小池一誠（幻触メンバー）の研究もされている。僕は静岡岡に一〇年以上住んでいたのだが、かつて本阿弥さんが「虹の美術館」を運営していたときに発行した、グループ「幻触」の対談集を今回のプロジェクトのためにちょうど読み返していて、（さらに僕は、虹の美術館も関係する「わたくし美術館」運動も調べていた）お声をかけさせていただいた。本阿弥さんは、丸石を究極の芸術として捉える信念を持っている方だ。②四方幸子さんは、メディアアートを専門にするも幅広い活動を行なっているキュレーターである。学生時代に山梨県の民俗フィールドワークを行なっていたり、現在も諏訪・八ヶ岳地域の信仰と地勢をリサーチしながら「対話と創造の森」を手がけるなど、近代的な視点にとどまらない範囲でメディアや創造についての探究を続けている。四方さんには、二〇一四年の札幌国際芸術祭、二〇一六年の茨城県北芸術祭でお世話になっており、分野に止まらない大胆な発想は参加者の方々に面白い影響を与えてくださるのではないかとお願いした。③④中沢新一さんと秘書の野沢なつみさん。僕は、二〇一九年に開催した石巻のReborn Art Festivalに参加していたときに北朝鮮の漂着船の供養塔を建てるというプロジェクトを発表していた。中沢新一さんも参加されていた。中沢新一さんは思想家で、父の厚さんが丸石神や道祖神の民俗調査をライフワークとしており、中沢さんの仕事の背景には丸石神は欠かせないものになっている。中沢さんとはそのとき初めてお会いしたのだが、僕の仕事を評価してくださって面識を持たせていただいたので、今回山梨で道祖神のプロジェクトを行うのでぜひひとお願いした。野沢なつみさんも山梨の丸石神のフィールドワークを長年続けている方で今回フィールドワークに同行していただいた。

深澤孝史

一九七二年、私は敷島町（現・甲斐市）にある小さな本屋の一人息子として生まれた。そんな環境もあってか、物心ついて以来、書物を通して様々な事柄に出会ってきた。丸石道祖神との出会いも関連の書物によってだった。丸石についての最初の記憶は、小学二年生のとき店に入荷した『丸石神 庶民のなかに生きる神のかたち』（木耳社）をめぐるものだ。店に運送会社のトラックがやってきて、東京から送られてきた雑誌や書籍が入った段ボールを下ろしていく。それを開封し、伝票と引き合わせるから書店の一日ははじまる。その日は、たぶん両親がその作業をしているのを横で見ていたのだと思う。段ボール箱から出された、紙箱入りの高級感ある本。箱の表面に印刷された写真を見て驚いた。卵のような丸い石がいくつも無造作に置かれているモノクロの写真。これは一体なんだろう？子供ころにも好奇心が沸いた。箱から本を出そうとした私に今は亡き父が「大切に扱うように」という趣旨のひとこととを発する。いつものうざったい小言を無視して本を取り出し、開く。本の中には多様な丸石の写真があった。新たな驚き。とりわけカラーの写真からは強い衝撃を受けた。見ている頭の中が「？」でいっぱいになる。ただ、丸いかたちから「いたずらみたいで面白い、子供が作ったものなのかもしれない」などと感じた。



母に「これは何なの？」と質問したが「なんだがよくわからないけど、神さまなんだよ。『丸石神』って書いてあるし」という程度の要領を得ない回答。小二の子供には「神さま」というもの自体が理解を超えていたので「？」が更に倍になった感じ。写真に写されたものが何なのかわからないモヤモヤを抱えて箱の中に本を戻そうとしたら、本体にかかっていたパラフィン紙をうっかり破いてしまい、亡父から「売り物を粗末にするな」とひどく怒られた。いま思い出すとなんだか笑ってしまうけれど、それが私と丸石道祖神の出会いだった。

●○○わたしと道祖神○○●

「書物を介した丸石道祖神との出会い」 一條宣好（敷島書房 店主）

どんぶらこっこ、すっこっこ。蹴裂の神が禹（う）の瀬を崩して以来、甲府盆地は色々な川が流れることになった。山梨県に顕著と言われる丸石の道祖神だが、丸石の生成にはいくつもの説がある。例えば岩脈に押し出された稀有な丸石説、あるいは火山の奥底で熟成された溶岩の芯説、大水のあと川原にやってくる丸石説などがそれだ。いずれにしても珍かな丸を崇めたことには違いあるまい。丸といえば、日輪であり、月輪であり、宝珠、卵、繭、蛇、赤子、円環や円満などの神聖と驚きは今も昔も私たちの心を揺り動かす。いまだに人は丸さへの憧れと驚異に動かされる。円陣環状線、球技での興奮、運送としての車輪、歯車、時計、暦、方位と様々な円が私たちを取り巻いている。また、石も記念碑、墓石、石畳、厳しい建造物、庭石、宝石、指輪、パワーストーン、磐座として私たちを捕らえて離さないものでもある。第一に、私たちの文化や文明は、石でモノを叩き、切り、磨り潰すことで生まれてきたのだ。言ってみれば、人間は石の子どもだ。現在だって自力では空を飛ばず水に馴染むことのできない私たちは大地という石の辺縁に生きるしかない。その生活の場にマレピトとして、山神が生み谷神の時輪に削られた稀なる石が突如として出現したとき、その丸い神を祀らずにはいられない。古い記憶は民話に残るが、たとえば丸石を「桃太郎」の桃に置き換えたらどうだろう。すでに子宝を諦めた老夫婦は元気な男の子を授かり、その男の子は来訪する悪魔である鬼を遠征してまで退治する。武器は団子だ。桃が東アジアにおいて聖なるものであることは共通する。中国では仙木として魔除けに用い、「西遊記」は西王母の桃を盗むことから始まり、日本ではイザナギが桃を投げて黄泉の国から脱出することから、人の生死は生まれる。ここナマヨミの国「甲斐」では、どんぶら焼きの団子は桃の枝に刺すのだ。

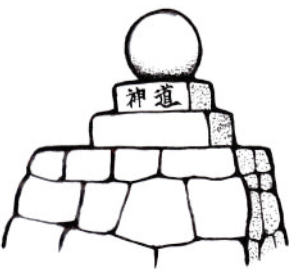
「道祖神諸説」 金丸貴臣

二十年以上前、私は、故郷山梨へ戻り、堀新吉さん、浅川画廊の浅川純至さんに出会い「丸石神」という言葉を初めて耳にした。それから、時を経て今回のプロジェクト、フィールドワーク一日目、私の住む山梨市七日市場地区の丸石道祖神を見て回った。いつからここに鎮座しているのか、表面が風化しザラザラ、黒ずんだ巨丸石、周りには数個の小ぶりな丸石、その傍らには初めて見知る盃状穴。道祖神をここまでよく見たことが無かった。道祖神と言え、小正月の「ぎっかんじょ」「どんぶら焼き」が主で丸石神をほとんど見ていない。このワーク中、特大の丸石道祖神前で顔馴染みの女性（九〇歳）に出会った。彼女は「私は、ここらで丸っこくて、いい石が出てくるところに持って来て置くだよ」と。我が家の畑も石が多いと、母がよく言う。畑の土が流れないよう畑の周囲には角が丸い石が美しく列をなして積まれ、小川の両脇も、家々の塀の基礎も同じく角の取れた石の垣があり、庭の植木の根元にも石がある。いつ、どこからこれらの石たちは来たのだろうか。小学生の時、自由研究で笛吹川の上流、中流、下流の石の状態を調べてスケッチしたことがあった。その頃、八幡橋近くへ父と漬物石を拾いに行った。今思うと、この漬物石前後の大きさの石が、我が地域にはゴロゴロ口しているではないか。何千年も前、きつとここを笛吹川が流れていたのかと思えない。一キロ程度北へ進むと、畑の境に積まれている石もいくらか大きいような気がする。その中でも目玉をみる大きき丸い石が選ばれ祀られ道祖神になったのか。傍らにある石が気になり、もつと北へもしくは南へ畑道を歩いて石たちを追ってみたいとなった。道祖神が、太陽や月であるとしたら、周辺の石たちは、無数にある星であり、連なる石の群れは天の川であろうか。空を見るように地に目を向けたらそんな風に思えてしかたがない。今日は新月、道祖神はどんなふうに見えるか、帰りに寄って見よう。

「石が気になる」 雨宮千鶴（山梨県立美術館）

ヒラリとなのか、トントンなのか 鈴木つな

さて、いよいよ展示が始まり石たちが会場にありありと存在するようになりました。・・・・石が色気を出し始めている。俺の丸さ加減をみてくれよ、私たちがイヤ感じに積まれてるでしょ、と実際に賑やかに声をかけてくる彼ら。訪れる人々も、石を持ったり叩いたりしています。玩具だった石が生活に必要な道具となり人々を助けるうちに、いつしか神様になってゆく。そこにはどんな行程があるのでしょうか。石と戯れながら、人は石とどうやって会話をしてきたのか試してみよう。・石は固くて重い。・石は同じ色と形が無い。・石は固有の温度を持つ。そんな、誰でも知っているようなことを発見した私ですが、発見の裏には、これまで思っていたのと違って実際は、という言葉が隠されています。見ているだけだとわからないその感覚、私は踊りながら、足の裏と背骨で感じます。目ではないのです。ああ、その感覚を誰かと一緒に味わいたいなあ。ということ、今回のパフォーマンスは訪れた方々とも石を介して会話してみようと思っています。いつの間にか石は神様になるのか、それともオブジェとして飾られるのか、はてまた邪魔だからとどかされてしまうのか、これはやってみないとわからない、壮大な実験でもあります。私は石を持って踊れるのか、も検証してみたい項目のひとつ。日ごろはヒラリとクルリと舞うことが多い私ですが、今回は石と対峙するためにトントンと踏んでみようかと思っております。春駒の映像を見るにつけ、これは舞ではなく踏なのであります。実験が成功するのかもしれないのか、神のみぞ知る事柄ではありますが、私には面白すぎるテーマです。石の上にも三年のつもりで取り組んでまいります。



丸石にやどるもの

中沢新一（特別調査員）

道祖神との最初の思い出がいつの頃になるのか、定かではない。在野の民俗学者であった父親の書齋には、どこから拾ってきた石棒や丸石が、山積みになった写真や資料と共に置かれていた。部屋はいつも薄暗く、光が射し込むと埃がキラキラと舞っていた。その傍らで、石はまるでひっそりと息をしているかのように、静かな気配を漂わせている。襖の隙間からのぞくと、その奥に背中を丸めた父親が熱心に机に向かっているのだった。

父親が民俗学の道に入ったのは、幸運な偶然によるものだった。学生時代から登山を愛好していた父が、ある日尾瀬に出かけた際、

山小屋にたまたま居合わせた武田久吉先生と

知遇を得たのだ。登山家で、植物学者で、民俗学にも精通していた武田先生と親しくな

た父は、戦前から様々な調査に同行させてもらい、その中で調査の手ほどきをうけたのだ

という。一緒に山に登り高山植物の精密な記録や採集調査を行なって、里におりてくると

今度は同じ態度を道祖神に向ける。イギリス人外交官アーネスト・サトウの息子で、イギ

リスの大学で植物学の研究をしていた武田先生は、当時興った柳田國男の民俗学とは少し

異なる研究態度で道祖神に向き合っていた。曰く、「柳田君の民俗学は少し文学的すぎる」。

武田先生はイギリス留学中にも触れていた「フオークロア」を、あくまでも科学として、

そこにあるものの姿をそのまま記録する、という態度を重んじていた。記録の基本は客観

的な写真を中心として、そこに判断を交えることなく淡々と事実を積み重ね、その先に浮

かび上がるものを見つめようとしていたのだ。この態度は、父の中にも生涯に渡って生

き続けていたように思う。ふたりは、山梨県

全域を歩きまわり、道祖神の調査を行なった。この活動は戦時下も行われ、外国の顔立ちを

した武田先生と父の取り合わせは、スパイの諜報活動を疑われ、幾度か嫌疑をかけられた

こともあるという。

戦後になり、私が生まれ、一時熱心に行なっ

ていた政治運動に翳りが見えはじめた頃、ふ

たたび父の中に湧き上がってきたのが、この

民俗学だった。武田先生からの誘いもあり、

私が高校にあがる頃になると本格的な道祖神

調査に乗り出したのである。日本石仏協会や

山梨の郷土史研究会にも所属して同じ在野の

研究者間の交流も生まれていた。休みの日に

なると私も調査に狩りだされ、自転車とバス

を乗り継いで村々を調査してまわったもの

だった。夢中になって、日に一本しかないバ

スを乗り過ごし、見知らぬ民家に宿を借りる

こともあった。

道祖神場につくと、まずは掃除が始まる。

周りの草を抜き、苔を落として道祖神をきれいにするのである。それから手を合わせ、場

所と写真、彫られた文字などを記録する。カメラは小西六（のちのコンカ）の白黒のフィルムだった。写真の枚数には制限があるので、

これぞという道祖神を決めたら一時間もかけて構図を決め、その間に近所の人が出てくると熱心に話をきいていた。武田先生から教

えを受けた客観的態度をもって記録を積み重ね、数十年に渡る調査の記録は『山梨県の道

祖神』（有峰書店、一九七三年）という書籍となっていた（のちに『石にやどるもの』（平

凡社、一九八八年）に収録）。

数多くの道祖神を知るにつれて、父の中に不思議と迫ってくる存在があった。それが「丸

石神」である。丸石は謎に満ちている。具象的で人間的である双体道祖神や、陽石、文字の刻まれた板碑などの存在は、調査を重ねていくとある程度の類型を見いだすことができ、そこから来歴なども推測することができ

る。しかし、丸石は道祖神として人々に寄り添いながらも、抽象的で、人間の理解を超え

るような、非人間性を持っているようにも思えるのだ。この不思議な存在はなんだろうか。丸石を思う時、父は人類の心にやどる、大きな謎に手をかけたのである。

（構成・野沢なつみ）

「ミシャグジ」について 芹沢昇

筆者は釈迦堂遺跡博物館で学芸員をしていたころ地元の勝沼町と一宮町にある石仏に興味を持ち調査したことがある。釈迦堂遺跡群は中央道建設工事に伴い発掘調査が行われた遺跡群で主に縄文時代の土器・土偶が大量に出土して話題になった。さらにあまり注目されていないが石器類も出土し、その中に丸石と呼ばれる石や石棒も多く出土している。丸石や石棒、さらに土偶は縄文時代の祭祀の道具とされていて現代の民間信仰のもとになっているとも考えられている。そのことが筆者を石仏調査へと誘ったのである。

手始めに地元にある石尊さんの位置を住宅地図にプロットするというアナログな調査方法を始めた。その調査中に道祖神にたびたび遭遇するのである。その数の多さは石尊さんの比ではなかった。いたるところに道祖神はあり、所によってはゴミ収集場所の隣であったり自動販売機の脇にひっそりあったり、しかし確かな存在感で鎮座していたのである。

そもそも道祖神は村境、峠などの路傍にあって外来の疫病や悪霊を防ぐ神でのちには縁結びの神、旅行安全の神、子どもと親しい神とされる。つまり我々のもっとも近くにいる神であり、最も親しい神である。様々な役割を持った神であるが特に決まった形はない。時には丸い石であり、場所によって小さな社に

納められている場合もある。それだけに時代の変遷とともに忘れられそうになっている。筆者はこの機会に道祖神について何らかの形で記録しなければならぬと危機感を持っている。しかし、本来は口伝で代々伝わってきた道祖神の祭礼を記録していいのか、さらに正確に記録できるのかという葛藤もあった。そこで再度、道祖神について調べ直すことにした。その調査中に「ミシャグジ」という神に出会ったのである。

「ミシャグジ」とは中部地方を中心に関東・近畿地方の一部に広がる民間信仰（ミシャグジ信仰）で祀られる神である。長野県にある諏訪地域はその震源地とされており、実際には諏訪大社の信仰（諏訪信仰）に関わっていると考えられる。全国各地にある霊石を神体として祀る石神信仰や、塞の神・道祖神信仰と関連があるとも考えられる。「ミシャグジ」の発音は「サク」「シャグ」「サグ」「サコ」「サゴ」「ショゴ」「ミシャグチ」「サグジ」「ミサクジ」「ミサグチ」「シャクジン」「シュクジン」「シュクジ」「シュクシ」「シキジン」「シキジ」など。さらに「御左口神」「御社宮神」「御射宮司」「御社宮司」「御作神」「石護神」「石神井」「宿神」などと表記する。当て字と漢字の組み合わせも大変多く 200 以上もあるといわれている。ちなみにかつての釈迦堂遺跡群の一つで現在

は中央道釈迦堂パーキングエリア上り線になっている場所は三口神平（さんこうじんだいら）と呼ばれている場所であるが、三口神はミシャグジとも読む。このことからミシャグジ信仰の場とも考えられ、また「ミシャグジ」がなまって釈迦堂となったとも考えられている。長野県 750 社、山梨県 160 社、静岡県 233 社、愛知県 229 社、三重県 140 社、岐阜県 116 社、滋賀県 228 社ある。長野県の「ミシャグジ」をさらに細かく分類すると諏訪 109 社、上伊那 105 社、下伊那 36 社、小県 104 社などが多い郡であるという。そのほか関東各県にも見られる。

「ミシャグジ」の研究は藤森栄一・今井野菊・宮坂光昭らがはじめ、これを野本三吉、北村皆雄、田中基の 3 人が古部族研究会を作り継承し「古代諏訪とミシャグジ祭政体の研究」（古部族研究会 人間社文庫）をまとめた。この研究で「ミシャグジ」と石棒や石皿との関係が明らかになった。今井野菊の実地踏査で古木の根元に石棒を祀るのが最も典型的な「ミシャグジ」のあり方であることが判明した。このことから、「ミシャグジ」は木に降りて、石に宿る神霊と信じられていたと考えられる。北村皆雄は、「ミシャグジ」の神体となっている石棒や石皿のほとんどが縄文中期のものであると指摘し、石棒は本来のミシャグジの神

体ではなかったとする説に対して、ミシャグジ信仰のルーツを縄文中期の地母神信仰に求め、石棒の中にその信仰的胚珠をもっていたと捉えた。いっぽう宮坂は神木・石棒信仰を古代の蛇信仰と結びつけ（神木 - 蛇 - 男根 - 石棒）、諏訪大社の龍蛇信仰はやはり縄文中期に遡るといわれるミシャグジ（石棒）信仰と繋がっていると考えた。

長野県から山梨県には縄文時代の遺跡が多く見つかっている。以上のことから筆者は「ミシャグジ」とは縄文時代からある民間信仰で、木や石に神がおりてきて、それを媒介として祈りを捧げてきた対象であったと考える。このミシャグジ信仰が後に諏訪信仰とかかわりを持つようになっていったのであろう。前述のとおりミシャグジ信仰は霊石を神体として祀る石神信仰や、塞の神・道祖神信仰と関連があると考えられてきた。しかし厳密に言えばミシャグジ信仰と道祖神は似て非なるものであり、別の神である。いずれも我々の近くに存在し庶民の様々な願いを叶える神としてあり続けてきたことは間違いなく、これからも一番近くにいる神であり続けることであろう。

道祖神小説 石の満月（後）

黒田康之

「なあ、キスしていいか。俺、直ちゃんを抱きしめてキスをしたかったんだ、ずっと」

昌彦の声は真剣だった。直文はその真剣さを背中を感じながらそのわけを聞いた。

それは高校の卒業式も過ぎた頃だった。国公立大学の二次試験を終えて家に帰ってきた直文は、何か落ち着かず家を出て、何かに憑（つ）かれたように町の中をぐるぐると歩いた。共通一次試験はいい感触があったが、この二次試験は難問だったせいもあるかもしれない。すでに私大はいくつか受かってはいたが、むしろ追い込まれた感じがしていた。

昌彦の家を今来たように過ぎて歩いて、直文は昌彦に会った。昌彦は驚いた顔をして「直ちゃん」と言った。頼まれた届け物を近所の家に届けた帰りだと言った。顔を合わせた昌彦は「どうだった」と聞いた。直文は生返事だけをして、今来たのと同じ道を歩いた。そうしてこの道祖神場に来て二人は立ち止まった。今のように街灯は明るくなく、もしかしたらなかったかもしれない。ただ月の光がはつきりと明るかった。もう高校生でも社会人でもない二人はとりとめもなく将来の夢を語った。

語ったがそれはすでに今の地面とびつたりとくっついた、明らかな予想でしかなかった。二人はその予想を夢のように語ったのだ。どうでもいい時間は思いがけず早く過ぎた。「じゃあな」と言い、昌彦は家路に戻ろうとし、直文は道祖神の石垣にもたれていた。角を曲がろうとして振り返って、昌彦は直文の横にたたくむ女を見た。女は薄衣をまとっただけで直文の横で表情を殺したような冷たい顔で立っていた。しばらくして女は薄衣の袖をふわふわと動かすどゆっくりと踊り始めた。女が踊り始めるとその軌跡を襦袢（じゅばん）

（だけ）を着た見知った少女たちがそれについて踊り始めた。裕子。香代子。道代。直美。宏美。和子。昌彦が知っている限りの全ての少女たちが、直文を囲んでなかば裸身をさらしながらぐるぐると踊り始めた。早春の空気に少女たちの匂いが風になった。それはそんなに長い時間ではない。しかしながらその呪縛は昌彦に、自分にとっての直文を確信させるに十分な温度と明度を持っていた。

直文と昌彦が再会する老人の葬儀まで、昌彦にとって全ての女は直文だった。あのふくよかでのこやかな奥さんすらも、あの時の直文と思っ

て抱き三人の子を授かった。幻影だったかもしれないが、あの瞬間の鮮やかさは昌彦を三十七年も呪縛したのだ。昌彦の体温と酒の匂いのする呼吸に、直文という樹木の根に絡みつく大きな丸石を感じた。

昌彦は直文の首筋に顔をうずめ、優しく口づけをした。直文は静かに昌彦を振り解いた。そうして「俺は俺の妻を愛し、子どもを授かり、そうして育てた」と、満月よりもやや瘦せた今の月を見上げた。

それから二人はふらつきながら直文の家へと歩いた。家に着くと直文は軽く手を振り、昌彦は軽く会釈をして道に戻った。

「そうか。満月だったかもしれない」直文は一九八五年三月五日の月を心に浮べた。

家に着いて、直文は長男と妻からの着信があることに気がついた。

（了）

